

令和元年7月16日
相馬地方小学校長会
第128号
発行責任者 鈴木宣雄
編集責任者 遠藤和宏
発行所 高田印刷所



**新学習指導要領の
さらに向こう側にあるもの**
福島県教育庁相双教育事務所長
佐藤由弘

大熊町教育委員会が主催した「おおくま町調べる学習コンクール授業研究会」に参加した。帝京大学教授の鎌田和宏先生のご講演の中で、「これからの中学校教育はどこに向かっているいるのだろうか?」というテーマで、内閣府が提唱している「Society5.0」について紹介があった。20××年の近未来の「超スマート社会」のコンセプトが提唱されている([https://www.gov-online.go.jp/cam/s5/ 参照](https://www.gov-online.go.jp/cam/s5/))。Society5.0の近未来における学校の姿は、「学校Ver3.0」として描かれている。「学校 Ver3.0」では、公教育の役割は、「子どもの学びの状況を観察し、個々人に応じた学びの実現を支援すること」にあるとし、学校では、実体験や他者との対話・協働をはじめ、多様な学校活動の機会を公正に提供する役割が重視されている。教師は、「個別最適化された学びのまとめ役(ラーニングオーガナイザー)」として、「個々の子どもの学びと授業における協働学習のデザインとプロデュースの能力」が求められている。

新学習指導要領において、「新しい時代に必要な資質・能力の育成と、学習評価の充実」を目指し、「新しい時代に必要な資質・能力を踏まえた教科・科目等の新設や目標・内容の見直し」を行いつつ、「主体的・対話的で深い学びの視点からの学習過程の改善」を図ることが求められたばかりであるが、2020年度の新学習指導要領の完全実施の向こう側に、すでに次の学校のあるべき姿(「学校 Ver3.0」)が描かれている。AI時代の到来は想像以上に速い。押し寄せる時代の荒波の先端を確実にとらえ、乗りこなすバランス感覚が「キャプテン(船長)」としての校長に求められていると強く感じる。



新しい時代の風の中で
相馬地方小学校長会長
鈴木宣雄

「令和」という新しい時代が幕を開けました。今の天皇陛下は自分と同年齢ということもあって、これまでの天皇陛下よりもより親近感があります。特に何か変化があった訳ではありませんが、10連休の間は、明るく穏やかな時代がやって来るのではないかという高揚した気持ちになりました。

さて、小学校では、来年度からの学習指導要領の完全実施に伴い、新たな時代へ向かいつつあるこの1年になるのではないでしょうか。相馬地方の小・中学校では、授業時数の確保ために夏休みが短くなります。各学校では、行事や対外的な活動の見直しなどを図り、やっと授業時数を確保してやれやれと思っていたところに、来年度からは3年生以上で1コマ時数が増えます。この1時間をどうやって生み出せばよいのかを考えながら、今年度の教育活動を進めていく必要があるのではないでしょうか。

その一方で、働き方改革関連法案が成立し、この4月から教職員の勤務時間の適正化がより厳格になりました。最低年5日の年休の取得、超過勤務は原則として月45時間を超えず、かつ年間360時間を超えないことなどが盛り込まれました。今や「ブラック」とも揶揄されるようになった学校現場での勤務の在り方を大きく見直す必要に迫られています。

今、私たちには、授業時数の増加と勤務時間の適正化いう一見相反することに、まったくなしで対応することが求められています。解決策はすぐには見つからないかもしれません、小学校長会での情報交換や連携を密にしながら、児童の健全な成長と学校教育の充実・発展のために、相馬地方の小学校がよりよい方向へ進めることを願っています。

私の学校経営

「強み」を生かして

南相馬市立原町第一小学校 伏見 康弘

「原一小の『強み』は何だろう？」

教育課程編成時のSWOT分析の結果、「児童、教職員の数が他の学校と比べて多い」、「外部機関等からの協力を得ることができる」、「公共施設等が近くにあり、利用しやすい」、「保護者が協力的で、PTA活動も活発である」、「経験豊富なスタッフが多い」等の回答が先生方からありました。

学校経営において、「強み」を生かせば「特色ある学校づくり」を進めることができます。そこで、本校の「強み」を生かしながら、以下の3点に取り組んでいます。

1つ目は「組織的な取り組み」です。他の学校と比べて教職員の多さが強みです。それを生かすため、主任を中心に全員が協力して目標や目的達成に取り組んでいくように隨時指導助言に努めています。

2つ目は「保護者との連携」です。協力的な保護者が多いことが強みです。PTA役員との連携を密

にし、あいさつ運動やPTA主催行事等に保護者が主体的に取り組んでいけるようにしています。

3つ目は「外部講師の活用」です。地域には専門性に優れた方がたくさんいます。その強みを生かすために、その方々を講師として招聘し、子どもたちの体験活動が充実するようにしています。

今後も、学校内部や外部のよさを「強み」として捉え、学校経営の充実に努めて参ります。



学校紹介

ICTと食育と花いっぱい

新地町立駒ヶ嶺小学校 遠藤 和宏

本校の特色ある教育活動の1つ目は、総務省及び文科省の事業を受けたICT教育に取り組んでいることです。全ての教室に電子黒板が配置され、タブレット端末機が一人一台ずつ備え付けられています。またICT支援員が配置され、授業の充実を支援しています。関係機関と連携しながら、活用力と学ぶ意欲、思考力・判断力・表現力を高めています。

2つ目は、健康的な生活に向けた食育の充実に取り組んでいることです。「新地の子どもは、さわやかだ！」をスローガンとして、魚や野菜、大豆食品等を中心とした食材、地場産物を活用した給食、親子食育講座、我が家のおすすめ料理コンテストなど町をあげて食育を進めており、子どもたちだけでなく、保護者の意識も高まっています。

3つ目は、花いっぱい運動を中心とした緑化活動や学校環境整備の充実に努めていることです。本校

は、昭和51年に緑の少年団を発足させて以来、伝統的に地域と連携した緑化活動や花いっぱい運動に取り組んでいます。その成果が認められ、今年度は緑化推進運動功労者内閣総理大臣賞を受賞しました。本年度も、地域の方々にもご協力をいただきながら、花いっぱい運動を進めていきます。

人と自然が共に輝き、笑顔あふれる新地町。駒ヶ嶺小学校は、まちづくりへの貢献をめざし、日々教育活動に励んでいます。



隨想

あいさつの力

南相馬市立石神第二小学校

木村 恵子

先日、学校にうれしい電話がありました。「この間、地域で石二小の子どももとすれ違ったとき、さわやかに『こんにちは』とあいさつされました。そのあいさつに元気をもらい、嬉しい一日を過ごしたんですよ。」

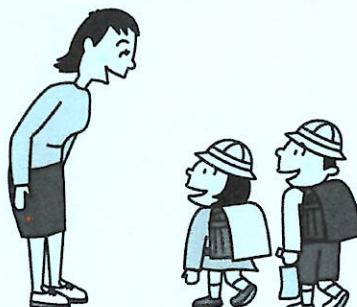
その後、全校集会でこの嬉しいニュースを伝え、児童や教職員と喜びを分かち合いました。わざわざ電話で学校に伝えてくださる地域の方がいることも感激です。この出来事を通して「学校が地域を元気にしていく」ことの大さを感じました。

さて、石神地区は地区をあげてあいさつ運動に取り組んでいます。昨年12月には「石神青少年を育てる会」が非行防止キャンペーンとして、あいさつ運動を行いました。石神3校の昇降口で地域の方が、キャンペーングッズを配りながら「おはようござります！」と声をかけます。

また、石神3校PTAも連携してあいさつ運動を取り組んでいます。まずそれぞれの学校で子どもたちからあいさつに関する標語を募集しました。その中から優れたものをひとつずつ選定し、のぼり旗を3種類製作しました。3つの「あいさつのぼり旗」の標語を紹介します。

- あいさつを げんきにすると えがおさく
- 目を合わせ 心の通う あいさつを
- あいさつは みんなを繋ぐ 愛言葉

現在、学校周囲に掲げられたのぼり旗が風にはためいています。まるで地域や学校を応援しているかのようです。その風が、子どもの心にも大人の心にも伝わり、大きなうねりとなって地域に「あいさつの力」が育つことを願っています。



奇跡的に出会った仲間達！

南相馬市立原町第二小学校

志賀 英司

昨年度、卒業式を間近に控えた時期に6年生とグループごとに4日間、一緒に校長室で給食を食べる機会を設けました。以前も行っていましたが、児童はとても楽しみにしていて、普段聞けない話をしてくれました。6年生は給食の時間になると、配膳されたお盆を手に校長室を訪れてきました。グループにより雰囲気や話題も違いました。「校長室に入るのには、1年の学校探検以来だ。」「二小に転校してきてから初めてだ。」など校長室をとっても遠くに感じている児童が多いのにはびっくりさせられました。

3日目のことでした。話題は卒業のことになり、ある児童が、「校長先生、僕たち6年生は奇跡の出会いの卒業生なんだよ。」と言ったのです。「え、奇跡の出会い？」と聞くと、みんなが次のように話してくれました。「あの大震災がなかったら絶対に出会っていない仲間なんです。」「震災前に原二小学区に住んでた人はほとんどいません。」よく聞いてみると、小高区や鹿島区、原町区など原二小以外の学校に通う予定の児童が震災によって原二小に在籍し、同じ学校から卒業する仲間になったというのです。絶対に仲間になることがなかった6年生、あの大震災がこのクラスを創ったのです。大震災という暗いイメージだけだったのに、辛いこともあったのに、児童たちは出会うことの無かった仲間達と同じクラスになれたこと、一緒に原町二小で卒業することを喜びに変え、楽しみにしていたのです。そのことを何気なく話す児童に感動しました。

「奇跡の出会い」という言葉を胸に、「負けるなよ。」と呟きながら卒業証書を手渡した思い出に残る卒業式でした。



新会員の声



八幡の拠点めざして

相馬市立八幡小学校

島田 祥司

朝、校長室のドアを開けておきますと、「校長先生おはようございます。」と元気な声の届けもの。幼稚園に行きますと、「あ、園長先生だ！」と遠くから私の存在に気付いて、手を振って笑顔の贈りもの。（さあ、今日も一日がんばるぞ！）自然に力が湧いてまいります。教師をやってよかった、と改めて実感する瞬間もあります。

また、柔らかにしなやかに子どもたちと向き合う八幡の先生方の姿にも力をもらいます。いつも一所懸命、慈厳不二の信念をもって、ともに汗を流す仲間であるのだ、と温かい気持ちになります。

さらに、保護者を含め八幡地区のみなさまの真心にも感動します。惜しみなく学校に協力し、子どもたちを見守ってくださる方々に心から感謝です。

今後も、地域の拠点「笑顔いっぱいやさしさいっぱいの八幡」を築いていきたいと思っております。



「温かみのある学校づくり」 を目標に

相馬市立桜丘小学校

渡邊 義人

今から23年前の平成8年から6年間勤務した桜丘小学校に校長として着任できたこと、大変嬉しく思っています。さらに、行事や集会、職員会議や人事評価期首面談などで、子どもたちや先生方に直接話すことができること、私の話に対しての評価である反応がすぐさま返ってくることが、5年ぶりに学校現場に復帰できた私にとって何よりも嬉しいことであります、大きなやりがいを感じています。

なかなかうまくいかないですが、私の学校経営の基盤である、教師同士、児童同士、教師と児童、教師と保護者が互いの立場や思いを尊重し合い、そして共に成長する「温かみのある学校」づくりについて、1年生にも理解できる話し方や内容を工夫したり、経験年数に応じて先生方の変容を促す伝え方を工夫したりしていきたいと考えています。皆様方のご指導をよろしくお願ひいたします。



飯豊いいところ！

相馬市立飯豊小学校

永峯 秀桐

「飯豊いいところ！飯豊いいところ！飯豊いいところ！」「乾杯！」この言葉でPTA歓送迎会が始まりました。田んぼや麦畑が広がる田園風景、そこに立つ、地域に根ざし愛されている飯豊小学校を強く感じます。遠い通学路を朝早くから歩いてくる児童たち、元気に挨拶を交わしています。その姿を後ろから見守り隊の方々が、やさしい表情で見守ってくれています。まさに、地域の宝である子どもたちを、地域全体で守り育していく気持ちが伝わってきます。

この飯豊小学校に赴任したご縁を大切にし、子どもたちが、自分の力を試せるよう、前向きに挑戦できるよう、家庭や地域と連携しながら学校経営を進めていく覚悟です。

相双地方校長会の諸先輩方のご指導ご助言をどうぞよろしくお願ひいたします。



小さな学校の大きな運動会

南相馬市立太田小学校

高田 昌幸

太田小学校・太田地区ふれあい運動会も今年で6回目となりました。太田小学校は児童数49名の小さな学校ですが、競技への参加者は約500名にもなります。それは、学校と地域の各団体が太田生涯学習センターを中心に実行委員会を作り、地域としての運動会を開催しているからです。昨今、開かれた学校から、地域と共にある学校へと学校のあり方も変わりつつある中、社会に開かれた教育課程を実現している最先端の学校と言えるかもしれません。

太田小ではこの他にも、生活科や総合的な学習の時間を使った老人会等との連携・協働による地域交流活動が全学年で計画されています。新任ではありますが、地域と共に、将来の地域を担う人材である子どもたちの育成に全力で取り組んでいきたいと思いますので、今後とも相双地方校長会の諸先輩方にはご指導・ご助言を賜りますようお願いいたします。

編 集 後 記

鉄棒練習の最中に足を運ぶと、子どもたちは自分の技を披露したくて、「見て下さい」とお呼びがかかる。「上手だね」とほめてやると、「私も見て」と3~4人が同時に技を披露しようとする（笑）。ほめることでやる気を引き出す心理作用を「エンハンシング効果」と呼ぶ。これからもたくさんほめていきたい。第128号発刊にあたり、玉稿をお寄せいただいた相双教育事務所長様はじめ、諸先生方に厚く御礼申し上げます。